

すぎかるプロジェクト報告書

作成日 2016/5/23(月)

作成者 東京大学小林真理ゼミ記録班：照井敬生、小谷野滉、東秋帆

目次

1. はじめに -すぎかるプロジェクト概要-
2. フリーペーパーの作成に至るまでの活動
 - (1) 蔵の町並みキャンパス事業への参加 (2013-2014年度)
 - (2) 文化プロデュース講座 (2015年度)
3. フリーペーパー各記事の内容・作成過程
 - (1) 記事企画手順
 - (2) 各記事の内容・作成過程
 - I メイン3記事
 - ① インタビュー 「となりの須坂人」
 - ② 対談 「アートマッチ」
 - ③ イベント体験レポート 「みんなの体験レポ」
 - II その他の記事
 - ① 地域の歴史紹介 「須坂のむかしばなし」
 - ② 音楽演奏場所紹介 「Suzaka Musicbase」
 - ③ 音楽活動家紹介 「ぼくらのまちの奏者たち」
 - ④ サウンドスケープ記事 「音風景に注目！」
4. フリーペーパー作成後の活動
 - (1) 蔵の町並みキャンパス発表
 - (2) フリーペーパー配布
5. おわりに

1. すざかるプロジェクト概要

「すざかるプロジェクト」は、長野県須坂市において、須坂市文化芸術振興事業団、須坂市市民有志、東京大学小林ゼミが連携し、フリーペーパー「すざかる」を作成したプロジェクトである。2015年度の夏から始まり、翌年3月にフリーペーパーは発行された。

このプロジェクトは須坂市文化振興事業団と小林ゼミが共同で開いた市民向けの講座「文化プロデュース講座」で生まれた企画を実施に移したものである。この講座は須坂の文化活動を活発化させることを目的に、具体的な企画案を考えるものであった。講座における話し合いの結果、市民およびゼミ生の合意案としてフリーペーパーの作成が決定された。現状では市民の文化団体同士がうまく連携できておらず、文化活動を行う上で不便に感じることがある、また地域全体として文化活動の盛り上がりに欠けている、といった市民の声を反映した選択である。フリーペーパーを作成することで須坂の文化活動者同士が「つながる」ことが目指された。また、フリーペーパーは試作品として「すざかる0号」と名前をつけられた。あくまで地元市民が主体となり地域の活動が行われることが理想であり、小林ゼミ生が関わる今号は市民への一つの提案であるからだ。市民が「すざかる0号」を気に入ってくれた場合、1号以降を発行してくれることを期待した。0号の記事内容としては、多くの人になじみが深い音楽活動を集めることに決めた。

「すざかる」プロジェクトは、「フリーペーパー作成」という方向性が決まった9月半ばから、最終的な冊子作成・配布がなされた3月半ばまでの約半年の期間で実施された。記事企画はゼミ生数人からなる編集委員会で行った。その後ゼミ生が記事ごとに班に分かれ、市民と共に記事を作り上げていった。毎週水曜日のゼミの時間は、専ら各班の進捗状況を確認する会議となっていた。

フリーペーパーの最終版は、B5版22ページの冊子を1000部印刷し、須坂市内における文化活動の担い手を対象とした配布活動を行った。この報告書はフリーペーパーの作成前から配布までの過程について記述している。

2. フリーペーパー作成に至るまで

(1) 蔵の町並みキャンパス事業への参加 (2013-2014年度)

フリーペーパー「すざかる」作成の出発点は2015年8月から始まった文化プロデュース講座であった。しかし2015年度以前にも小林ゼミは2年間須坂に関わるプロジェクトを実施しており、その体験が文化プロデュース講座へと繋がっている。小林ゼミは2013年から、須坂市において毎年2月に開催される蔵の町並みキャンパス事業への参加していた。この事業において小林ゼミは須坂の文化に関わるプロジェクトをいくつか提案してきた。しかし、提案はしても実際には何も行動に移せなかった。それが今回のプロジェクト開始の動機となった。すざかるプロジェクトについて説明する前に、まずこのキャンパス事業において発表した内容を紹介したい。

○2013年度

須坂市が公表している「文化芸術振興ビジョン」という文化政策の指針に注目し、このビジョンを活かして文化活動の振興を促進することを考えた。その結果、「文化芸術振興ビジョンの育て方」というコンセプトで5つの企画を提案した。これらは市民を巻き込むきっかけづくりを目指す企画である。具体的には、市民によるビジョンの評価、時間を過ごせる場所/カフェとワークショップ、Facebookの有効活用、子育て層向けのアートプロジェクト、市民プロデューサーの発見と育成といった企画である。

○2014年度

続いて2014年度は、前年よりも少し踏み込んで「文化芸術振興ビジョンの咲かせ方」というコンセプトで4つの企画を提案した。それらは、具体的な実施計画や将来への展望を意識した企画である。具体的には、事業目標・プロセスの評価と修正、人材＝創造人づくり、政策評価のための市民討議会、映画で若者が集まる場所づくりといった企画を紹介した。

(2) 文化プロデュース講座（2015年度）

ゼミとしては二回の発表を行ったわけだが、発表した企画の実現には至っていなかった。そこで、2015年度は何か具体的な成果を残すことを目標にした。具体的な成果として目指したのが、須坂市民と協働したアートプロジェクトの実現である。その第一歩として、文化振興事業団の協力で、「文化プロデュース講座」というものを8月から9月にかけて三回実施した。

一回目の講座は、8月22日と23日の二日間にわたり須坂市のメセナホールで開催した。ゼミからは小林先生とゼミ生六名、文化振興事業団からは2人、市民の方は一日目に2人、二日目に6人が参加した。この講座では、主にゼミ生がアート・マネジメントの事例紹介を行い、それに関してディスカッションを行った。それをもとに、市民の方には各自で企画を考案してもらい、次回の講座に持ち寄ることにした。

二回目の講座は、9月1日に同じくメセナホールで開催した。ゼミからは小林先生のみが参加し、市民の方が持ち寄った企画についてのディスカッションを行った。その企画に関してはゼミ生全体で共有した。

三回目の講座は、9月26日に旧上高井郡役所で開催した。ゼミからは小林先生とほぼ全員のゼミ生が参加し、文化振興事業団の方2人と市民の方6人も参加した。この講座では、年度内に実施する企画を決定することをめざして、四つのグループに分かれてディスカッションを行った。各グループの案は、須坂市内のイベント情報が集まる場所を作る、マップを作る、フリーペーパーを作る、市民によるポータルサイトを作るというものだった。それぞれ方法は別だが、四つすべてで市民を「つなげる」というキーワードが一致していたため、今年度は須坂市内の文化活動者の「つながり」をめざすプロジェクトを実施することが決定した。そこで、ゼミ生が四つの候補からフリーペーパーを選び、市民と共同でフリーペーパーを作るプロジェクトが始動した。

3. 各記事の内容・過程

(1) 記事企画手順

フリーペーパー「すぎかる」に掲載されている7記事の内容の考案は、ゼミ生6人で構成される編集委員会で行った。少しでも意味のあるフリーペーパーにするため、次のような手順で記事の企画を行った。

まず初めに考えたのは、なぜ須坂の文化活動者がお互いにつながっていないのか、つながりを妨げる要因は何であるのか、ということである。そもそも「須坂の文化活動者の活動をつなげる」というのがフリーペーパーを作成する目的である。この目的を達成するような記事にするため、次の様な要因を考えた。

- A 自分の活動に満足していて周りに関心がない
- B 他の団体・人・ジャンルの面白さを知らない
- C つながりの希薄さに違和感があるも、行動に移す勇気がない

このように要因を3つに分類した上で、これらの問題解決に適した記事を企画していった。例えば対談者の実際のコラボレーションを見据えた対談記事を作ったら、周りの活動の面白さを知らない B の意識や行動に移せない C の意識を刺激することができる、という具合である。このように特に問題解決を意識して企画されたのがインタビュー記事、対談記事、体験レポート記事の3つである。これらの記事をメインとして、他にもフリーペーパーの内容を豊かにする記事が作成された。体験レポートは作業を進めるうちに様々な障害があり、掲載ページが減ってしまったが、もとはメインの記事として練られて企画されていた。

(2)各記事

フリーペーパー「すぎかる」のメイン記事はインタビュー、対談、体験レポートの3記事である。これら3つの記事はゼミ生が担当者として大体4人ほど割り振られ、それぞれの班ごとに記事の作成を進めていた。一方その他の記事はより少人数で行われたり、メイン記事の班が同時進行で担当するなどして進められた。次ページから、まずメイン記事、そしてその他の記事、の順番に記事の概要・作成過程など紹介していきたい。

I メイン記事

① インタビュー「となりの須坂人」

1. 内容

須坂で精力的に活動を行う音楽活動家2組のインタビュー記事である。話を伺ったのは、尺八奏者で須坂市文化芸術協会の会長でもあるMさん、4人組ロックバンドHさんで、それぞれ3ページずつの記事にまとめた。インタビューでは、活動の楽しみ、苦労、活動を広めるための努力、今後の展望が語られている。何より音楽に対する熱い気持ちのこもったインタビュー記事となった。

2. 目的

記事の目的は二つある。一つ目は、須坂の音楽活動家を紹介することで、他者の文化活動に関する知識がない人に知識・興味を広げてもらうことである。二つ目が、記事で紹介されている精力的な活動の様子が、「須坂の現状を変えたい、何かしたい」と考えている人の行動のきっかけとなることである。

3. 過程

記事作成の過程は、取材対象者の選定、対象者への連絡、取材日の調整、取材準備、取材、記事執筆、というものであり、2015年10月の頭から、翌年2月の頭まで時間がかかった。まず初めにインタビューの取材先選定に取り掛かった。活発な活動をしていて、活動歴の比較的長い人と短めな人を一人ずつとりあげる、という選定基準を考えネットでリサーチを行った。ひとまずの選定を行ったが、対談で掲載される人物との系統がかぶらないようにする必要があったため、市民による提案と対談班の意向を踏まえて最終的には決定した。決定した取材先へはメール、あるいは電話で取材申し込み・記事企画書の送付を行い、取材日を相談した。年末だったこともあり、連絡を取り始めてからだいたい1ヶ月後に取材日が決定した。取材内容は企画段階からある程度決まっていたが、取材日一週間ほど前から最終的なものまでつめた。まずネットにあがっている取材対象者に関する情報を班員全員で共有して読み、当日どのような話がされるのかを予想しながら当日の質問の流れを決めた。

取材日当日には須坂市文化振興事業団の職員1人と講座参加者の市民の方1人にも同伴いただき、1時間～1時間半ほど取材を行った。その後文字起こしを経て記事の執筆を行った。

4. 反省

記事の内容としては、活動的な市民アーティストから様々な活動の刺激となるような話が紹介され、意義のあるものになったと思う。またMさんの取材日当日には市民の方に集まっていたことで、市民同士の交流のきっかけともなっていた。

しかしインタビュー後の記事執筆にまつわる過程で様々な反省点があった。まず原稿の執筆とレイアウトによる文字数制限との調整に苦勞し、結局レイアウトをしながら原稿の内容を調整することになってしまった。また2つのインタビューの分量を揃えることも大変で、1時間～1時間半行った取材の内容は当初の予定であった各々2ページに収まりきらず、3ページずつの記事となった。またこのようにレイアウトと記事の内容調整が同時進行であったため、取材対象者の記事内容チェックの時期が遅くなり、フリーペーパーの発行を遅らせてしまった。さらに話し合いでうまく収まったものの、取材対象者が記事内容最終チェックの段階で大幅な変更を加えたことに対する対応が難しかった。



② 対談「アートマッチ」

1. 内容

本企画の要となる対談者は、文化プロデュース講座にも参加し、フリーペーパー企画に強い関心を示して下さっていた S さんを中心に、彼女が関心を持っていた須坂市民の T さん、N さん、Y さんの 4 人に決まった。実際の対談を行う際には、1 人のゼミ生が司会進行を行い、もう 1 人のゼミ生が写真撮影やワークショップの準備等を行い、比較的円滑に実施することが出来た。対談の内容は、元々参加者同士の関心が高かったこともあり、参加者同士の情報交換や文化活動を行う上での教訓の共有などがなされた。

2. 目的

対談企画『アートマッチ』は、須坂における文化活動の担い手たちが互いに情報・意見の交換を行い、ネットワークを形成するとともに、須坂で文化活動を継続する上での問題点を、ワークショップを通じて解決することを目的とした企画である。

本記事は、文化活動を自身で行っており、なおかつ須坂の他の活動者と繋がることによって問題解決や自身の活動の更なる発展を期待する活動者を対象とし、対談をそのようなつながりの場とすることを目的としていた。加えて、須坂の文化活動者が対談記事を参照することで自らも他の活動者と繋がることを志向することも目指す企画である。

3. 過程

記事の作成に要した期間は、学生が 2 人で 2 ヶ月ほどであり、最初の 1 か月是对談企画のコンセプトを固めることに費やされ、その結果上記の企画目的が明確になった。その後、S さんを中心に対談者を探すことになり、その選定・依頼に一か月弱を要し、最終的に対談を行う運びとなった。

対談を行うにあたって、事前アンケートを行うことによって対談者の関心や問題意識を共有し、対談者の S さんとは事前打ち合わせを行うことで、対談をより円滑に進めるための情報共有を行った。こうした準備を行っておくことによって、ゼミ生が司会進行を行う本対談企画においても円滑かつ充実した対談を実施する素地が作られた。

対談企画は特に多くの参加者の協力と日程調整を要することから依頼および対談の実施に費やされる時間は他の企画より多めに見積もる必要があった。対談を実施した後には、数日中に文字起こしを行い、それを編集したものを最終的な記事とした。文字起こしの編集を 1 人が行い、それを叩き台として全員で議論するという記事作成のプロセスを踏むことになり、これは結果として円滑な進行の助けとなった。

4. 反省

対談企画が持つ他の企画と決定的に異なる特徴は、関わる人数の多さであり、それだけに余裕を持った日程調整と円滑な意思疎通が必要となる。今回の反省点としては、対談の日程調整に対する見積もりが甘く、繁忙期である年末を挟み、年度明けの対談実施となってしまったことが挙げられる。加えて、（これは他の企画にも共通するが）記事を作成した後に関係者に確認を取る期間を見積もっていなかったことから、参加者との間に齟齬が生じた点も次回以降改善すべき点だと言える。にもかかわらず、本企画が無事終了したのは、S さんという須坂側のコーディネーターの支援が得られ、なおかつ彼女と頻繁に意思疎通と目的共有を行った点が大きいと言える。



③ 体験レポート「みんなの体験レポ」

1. 内容

体験レポート記事「みんなの体験レポ」の内容は、2015年12月19日に須坂市のメセナホールで開催された「第8回クリスマスレクチャーin 須坂(3)」に参加して、そのレポートを書くというものである。レポートの内容としては、単純なイベントの感想だけでなく、広報活動に関する指摘や今後の提案も盛り込んだ。

2. 目的

体験レポート記事「みんなの体験レポ」の目的は、外部の視点を導入することで文化活動者に「気づき」を与えるということである。文化イベントの主催者はもちろん、この記事の読者にも、参加者の素直な感想を聞いて自らの活動を振り返る参考にしてもらえればと考えた。また、自分たちの文化活動以外にも面白いものがあるということを知ってもらうきっかけになればということも目指した。

3. 過程

記事の作成過程は、記事のコンセプトの決定、参加するイベントの選定、レポーターの依頼、イベントへの参加、記事執筆という流れで、10月下旬から2月上旬までかかった。当初の予定では、参加するイベントは二つで、レポーターはゼミ外部の須坂市民の方をお願いして4ページの記事にするはずであった。しかし、結果的には、参加したイベントは一つで、レポーターはゼミ生と講座参加者で務めることとなり二ページに分量を減らした。その過程をここから概観していく。

まず、記事のコンセプトとして、「気づき」をキーワードにしようということ早い段階で決定した。そこで、参加するイベントは、外部からの参加者に開かれているものにすることにした。当初、参加イベントは2つの予定だったので、ある程度長い歴史があるものと最近始まったものの2つにしようと考えていた。しかし、東京からインターネットの情報だけでイベントを選定するには限界があり、イベント選定は難航した。一度、参加するイベントは12月4日開催の「メセナの風」に決定したのだが、こちらの準備不足などもあり、取材を断念した。外部の方にレポーターを依頼するという件も、須坂高校の生徒や須坂市のフリーペーパーのライターの方が候補に挙がったが、いろいろな問題から最終的には断念した。そうした問題を経て、音楽という第0号のテーマから多少離れるが、イベント自体の興味深さから「クリスマスレクチャー」を取材することに決定した。レポーターはゼミ生と講座参加者で分担することにした。

イベントへの参加に際しては、ゼミ生で事前に留意点を決めて、講座参加者とも共有しておいた。イベントにはゼミ生3人と講座参加者1人で参加し、イベント中はメモをとりつつ、なるべく多くの写真を撮ることを心掛けた。イベント後は講座参加者との座談会を設けて感想の共有を行った。記事の執筆に関してはまず、イベントの概要・レクチャーの内容・広報・総評をゼミ生四名と講座参加者一名で分担して書いた。この時点ではまだ、文体は硬くレポート風だったが、最終的にはレクチャーの内容と広報の部分を会話形式で読みやすい文章にした。

4. 反省

良かった点は、ゼミ生が実際に須坂市の文化イベントに参加できて、その雰囲気を経験することができたということである。また、イベントの広報について、講座参加者が実際に町中のポスターを探してくださったり、ゼミ生がインターネットで調べたりする中で、その不十分さを実感できたのは良かった。

反省すべき点としては、参加するイベントを減らし、レポーターの依頼を中止してしまったこと

が挙げられる。「メセナの風」を中止にした原因としては、こちらの準備不足やイベント情報が把握しにくく予定が合わせられなかったことなどが挙げられる。レポーターの依頼を中止にした原因としては、先方への依頼が遅くなってしまったことや「クリスマスレクチャー」がもともと高校生に感想文を書かせる行事だったことで高校生にレポーターを依頼できなかったことなどが挙げられる。レポーターの依頼やイベント選定を早めにして、問題があればすぐに変更や対応ができる準備をすることが必要だと思った。



II その他の記事

① 地域の歴史紹介「須坂のむかしばなし」

1. 内容

須坂の歴史を扱った読み物記事である。音楽特集号なので、須坂に伝わる「須坂小唄」という民謡にまつわる歴史を紹介した。1ページ目に製糸業繁栄当時の須坂の地図を、2ページ目には「須坂小唄」にまつわる歴史を紹介した文章を掲載した。地図は、須坂の製糸業繁栄当時の須坂のおおまかな地図を描いたものであり、製糸業と結びつく工場や銀行、劇場などが記入されている。市民の方にとって楽しい発見があるような文章・地図の作成を目指した。

2. 目的

市民の地域アイデンティティを刺激することを目指した記事である。具体的には、まず市民の方に知らなかった地域の歴史を知って楽しんでもらうこと。そして製糸工場の工女の生活を明るくした須坂小唄の例から日常を少し明るくする文化の力を認識してもらうことも目標にした。

3. 過程

講座参加者の1人で、須坂の歴史に詳しい市民の方が大きな役割を果たしてくれた。須坂小唄に関する文章は文献をもとにゼミ生がまず執筆し、市民の方が修正すべき箇所を修正した。一方須坂の地図は、ゼミ生が須坂の地理、まして昔の地理に関する知識を持っていなかったため、市民の方に参考となる地図などの資料を送ってもらった。地図の原案を作成し、ゼミ内のレイアウト担当に絵を描いてもらった。文章・地図の作業とも、ゼミ生の作業自体は数日で終わったが、市民とのやりとりもあり1ヶ月以上の時間をかけて完成した。

4. 反省

市民の方に多く手伝っていただいたおかげで、市民が読んでも面白い、内容の詰まった記事を作成することができた。またきれいな地図ができたために雑誌をヴィジュアル的に楽しいものにできた。

一方で、市民との電話連絡においてちょっとした連絡ミス・勘違いがあったようで仕事の分担が当初想定していたものと異なるようになってしまった。電話の場合は細かい点までよく確認すべきであった。また記事の文章執筆に関しては、普段レポートなどしか書いてないと文章が硬くなりがちなので注意が必要である。



② 音楽演奏場所紹介「Suzaka Musicbase」

1. 内容

須坂で音楽演奏場所として使われている施設を取り上げ、演奏者・鑑賞者ともに行ってみたくなるような魅力を紹介した。紹介したのは2つの施設で、須坂市蔵のまち観光交流センターと旧上高井郡役所である。各々1ページずつのページを割り、施設で行われているイベントの紹介、施設利用のおすすめポイント、施設長から市民へのメッセージを写真付きで掲載した。

2. 目的

演奏場所紹介記事「Suzaka Musicbase」の目的は二つある。一つ目は市内で音楽演奏が行われている場所をデータベースとして紹介することにより、実際に足を運んでもらうことのきっかけとなること。二つ目は、この記事は場所やイベントの宣伝としての効果もあるので、音楽以外の文化活動に携わる読者に「自分のジャンルでも取材をしてほしい」と思ってもらうことも考えていた。

3. 過程

記事作成の過程は、取材対象場所の選定、場所の管理者への連絡、取材準備、取材日の調整、取材、記事執筆、というものであり、2015年10月の頭から、翌年1月末まで時間がかかった。

まずはじめに場所を選定し管理者への連絡を行った。当初、2015年の8・9月のゼミ生の須坂訪問時に把握していた場所、市民からの提案があった場所、合せて4ヶ所を紹介するつもりであったが、2施設と連絡がつかなかった。そのため取材は2ヶ所のみとなってしまった。取材準備としては記事企画段階である程度決まっていた質問項目を確認する程度で、取材当日は30分～45分程度で話を伺った。

4. 反省

施設長に時間をかけてインタビューをすることで、音響など演奏場所としての細かい魅力や施設長の思いを紹介することができたことは意義があったと思う。音楽活動家や観客が施設を訪れやすくなる効果があると思われる。

掲載施設の数が2施設にとどまってしまったのは反省点である。そもそも須坂に住んでいないゼミ生が市内の演奏場所を探すのが難しい。市民からの提案もしてもらったが、より広汎に場所を紹介するためには事前に須坂で様々な人から情報をききだす機会があった方が良かった。また、取材を希望していたミュージックバーなどに、メール・電話での連絡がつかないこともあった。直接場所を訪れ店主に交渉をすることができる市民にもっと協力を仰いでいた方が良かったと思われる。



③ 音楽活動家紹介「ぼくらのまちの奏者たち」

1. 内容

フリーペーパー内の他の記事で扱いきれなかった須坂の音楽演奏家の情報(グループ名、演奏ジャンル、連絡先など)を表にした記事である。フリーペーパー作成に関わっている市民が音楽演奏家の情報を募った。

2. 目的

この記事の目的は3つある。①より多くの音楽演奏家を記事で扱うことで、フリーペーパー作成の当事者を増やすこと、②音楽以外のジャンルの活動従事者に、そのジャンルでのフリーペーパー作成への期待感を持たせること、③読者に活動情報を提供し、その後のつながりのきっかけとなること、の3点である。

3. 過程

この記事はゼミ生が企画した段階では作る予定はなかったが、講座参加者の要望で作成することになった。それゆえ12月頭から作業がスタートし2月初めまで作業期間がかかった。

記事の作り方としては、まず記事に載せたい情報を書いてもらうためのアンケート用紙を作成し講座参加者に送付した。用紙を大規模に配るということはなく、講座参加者が音楽演奏施設の方と連絡をとり演奏家の情報を集め、演奏家本人に許可を取って情報を記入させてもらう、というのが中心であった。配布した用紙は中央公民館で回収を行った。

4.反省点

市民の方がほとんどの作業の手順を考案してくださった記事であり、市民の方が手がけた意味のある記事となった。

一方、フリーペーパー作成の途中から作成が始まった記事であるため、なんとなくの流れでインタビュー班がゼミ側の記事担当班となってしまった。インタビュー班は他にも場所紹介の記事なども担当していたため、荷重なタスクであった。一つの班が多くの記事を扱いすぎたために、市民と連絡をする際にどの記事の話であるか混同されてしまうこともあった。



ぼくらのまちの奏者たち

須坂には、バラエティー豊かな音楽団体がまだまだたくさんあります。記事では紹介しきれなかった情報を一挙にご紹介！

※2016年1月30日までにアンケートにご回答いただいた団体。

団体名	活動内容	活動形態	連絡先(※)
1 アムモジック	ダンスバンド	市民演奏会・各種イベント	市民演奏会09-9467-1888
2 クラック	アコースティック (楽器演奏・歌唱)	市民演奏会・市民演奏会	026-245-4929(須坂)
3 ナンムカハープ	楽器演奏	同上高学原校舎	099-9462-1201(須坂)
4 木ヲキ	アコースティック (ギタースタジオ)	市民演奏会・各種イベント	099-9462-1221(須坂)
5 毎日コーダー演奏部	コーダーアンサンブル(ポップス)	市民演奏会・各種イベント	市民演奏会09-9467-1888
6 アカペラバンド	音楽中心	市民演奏会・各種イベント	市民演奏会09-9467-1888
7 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル (楽器演奏・歌唱)	市民演奏会・各種イベント	市民演奏会09-9467-1888
8 オースティン	ジャズ	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
9 民謡協会	民謡演奏	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
10 シニアアンサンブル 楽団	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
11 シニア合唱団	合唱	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
12 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
13 シニアバンド	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
14 大宮カトリックアンサンブル	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
15 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
16 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
17 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
18 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
19 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
20 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
21 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
22 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
23 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
24 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
25 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
26 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
27 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
28 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
29 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
30 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
31 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
32 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
33 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
34 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
35 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
36 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
37 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
38 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
39 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
40 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
41 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
42 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
43 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
44 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
45 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
46 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
47 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
48 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
49 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888
50 楽団(クラシック)	クラシックアンサンブル	市民演奏会	市民演奏会09-9467-1888

④ サウンドスケープ記事「音風景に注目！」

1. 内容

ゼミ生が取材で須坂を訪れた際に須坂の環境音(風景の中からきこえてくる音)をテーマに俳句を作り、その中から選んだ俳句6句を須坂の写真とともに掲載した。軽く読める楽しい記事にした。

2. 目的

写真などヴィジュアルを重視した軽めの記事であるが、一応次のような思いがこめられて作成された。まず、フリーペーパーに外部の目線を取り入れるという目的がある。そもそも環境音は須坂市民にとっては身近すぎてあまり注目しないものであると思われる。そこで須坂を外側から見るゼミ生が新鮮な見方を提供することで「須坂はこのように見られているんだ、体感されるんだ」と須坂市民に感じてもらい楽しんでもらいたかった。さらに、須坂の外にいるゼミ生がこのプロジェクトに参加している事実を活かす記事にする、という目的もあった。

3. 過程

体験レポ記事のページが当初の予定より少なくなったために生まれた記事である。それゆえ12月初めから記事の作成が始まった。記事担当者が記事のコンセプトを決め、須坂に取材しに行くゼミ生に須坂で2首ずつ句を作ってもらうように依頼した。集まった俳句の中から良いものを選んで記事に掲載した。

4. 反省

綺麗な写真を使い、文字が少なく見目が綺麗な記事を作ることができた。読者にとって軽く楽しめる息抜きのページになったと思う。

一方で、記事に載せられるような良い写真を集めるのが大変だった。結局須坂ではなく東京で撮った写真も一部載せたが、そのようにしてとにかく完成度の高い写真を揃えることは大切だと思う。



4. フリーペーパー作成後の活動

(1) 蔵の町並みキャンパス事業

2015年度の蔵の町並みキャンパス事業が行われた2月6日には、まだフリーペーパーは完成していなかった。しかし多くの過程を終えていたため、すぎかるプロジェクトの概要などを発表した。

○発表の方針

2015年度は、実際に具体的な活動をしてきたので、その発表の場については例年通り蔵の町並みキャンパス事業で行うか、学会でのパネル発表にするかの選択肢があった。ゼミでの話し合いの結果、やはり須坂市での活動は須坂市の方に伝えたいということで、蔵の町並みキャンパス事業で発表することになった。発表の方針としては、市民と協働したフリーペーパー作成の目標や途中経過、今後の展望などを中心にすることにした。

○発表作りの流れ

蔵の町並みキャンパス事業での発表の準備は、フリーペーパー作成と並行して1月中旬頃から始めた。まず、スライドに関しては、大枠の流れとそれぞれの内容に割り当てる枚数を決めて、数人で分担する形で作成した。大枠の流れとしては、今までのゼミの問題意識、須坂に関わった過去の活動、2015年度の文化プロデュース講座、フリーペーパープロジェクトの説明というもので、発表時間が20分程度であることを考慮して全体の枚数が20枚程度になるよう調整した。分担して出来上がったスライドと原稿で発表の練習をする中で、ゼミ生同士で発表の問題点を指摘し、スライドの内容や原稿の言葉遣い、話し方などを改善させていった。こうして、計3回の発表練習を経て、発表者2人ともう1人のゼミ生が中心になって、スライドと原稿を直した。

○当日

2015年度は、2月6日に須坂市シルキーホールにて蔵の町並みキャンパス事業が開催された。当日ゼミからは、小林先生と、発表者2人を含めて5人のゼミ生で参加した。キャンパス事業には、学生や関係者、須坂市民の方などが150人程度参加していた。発表自体は、真面目な雰囲気の中、比較的多くの方が耳を傾けてくれていて、特に問題なく終えることができた。また、ほぼ完成したフリーペーパーを別室に展示したのだが、合間の休憩時間や懇親会で、フリーペーパー作成に協力していただいた方や須坂市の関係者の方から、いろいろな感想を伺うことができた。反応も概ね好評だった。今年度の蔵の町並みキャンパス事業は、フリーペーパープロジェクトを須坂市の方に紹介できたという点で、非常に良い機会だったと思う。

○反省

発表準備で、スライドや原稿を多くの人で分担して作成するのは良かったのだが、もっと早い段階で1人が体裁を整える作業をした方が良かったと思う。発表自体が少し硬いものになってしまったのは反省点だった。発表のリハーサルを3度も行い、大きい教室も借りてできたということは、場慣れするのに非常に良かった。

(2)フリーペーパーの配布

○計画

まず、配布を計画した流れを説明する。フリーペーパーの配布に関しては、部数を 1000 部にするという方針が決まった段階で、配布方法などの大枠を 11 月頃に一度話し合っていた。そこでまず、フリーペーパーは不特定多数に配るのではなく、文化活動に従事する市民を中心に配るという方針を決定した。その具体的な方法として当初考えていたのは、①文化活動の練習や会合を訪問する、②講座参加者のツテに頼るという二つだ。それらをメインにしつつ、文化施設などのラックに置くという方法も考えていた。

そこから徐々に計画を変更していく。まずは、文化活動の練習や会合を訪問するという案は様々な問題があるということで中止した。そこで、フリーペーパーに関わっていただいた方のツテを頼るという方法をメインにすることにした。それに加え、施設に置いてもらう部数も増やして、高校生などへの街頭配布という方法も考えた。そうして、実際にどういった方やどういった施設にどのくらいの部数を配布するのかの計画を立てた。こうして考えた配布案を須坂市文化振興事業団の小林宇壺さんとすり合わせ、最終的には、市や事業団の施設、市の関係者、講座参加者などには事業団の方から配布をしていただく形となった。これで 700 部が配布されることとなり、残りの 300 部を学生で配布することとなった。300 部の配布のに関しては、半分ほどはフリーペーパーの関係者に配る形をとって、もう半分はゼミ生が須坂を訪問して商店などに配布した。

配布の日程に関しては、フリーペーパーの完成が遅れたことで必然的に後ろ倒しとなり、3 月に入ってしまった。フリーペーパーの納品が 3 月 10 日だったので、それ以降の日程でゼミ生の有志が配布することとなり、3 月 23 日と 24 日にゼミ生が 3 人須坂に訪問して配布を行った。

○配布当日

ここからは、ゼミ生が行った配布活動の詳細を記述する。まず 3 月 23 日にゼミ生 3 人で須坂を訪れ、メセナホールにてフリーペーパーを 300 部受け取った。そこでまず、「ぼくらのまちの奏者たち」の 29 団体に 5 部ずつで合計 145 部をメセナホールに預けた。インタビューと対談で記事に協力してくださった市民の方 4 組には、合わせて 45 部という計画を立てた。(これは 300 部には含まれていない)。その後は、市内の商店などに徒歩で配布していった。詳細を箇条書きする。

3 月 23 日

- ・観光交流センター 20 部
- ・かねき 5 部
- ・梓屋 5 部
- ・旧上高井郡役所 5 部(事業団からすでに 5 部配布されていたものに追加)
- ・山下薬局 15 部
- ・カフェワラク 10 部(楠ワイナリーとフォルティアの紹介を受ける。)
- ・ゲストハウス蔵 10 部(ヤンネ 10 部、n-style 5 部もお願いした。)
- ・みのり 10 部

3 月 24 日

- ・湯っ蔵んど 10 部
- ・楠ワイナリー 10 部
- ・フォルティア 10 部
- ・綿幸サロン 15 部
- ・須坂駅 15 部
- ・須坂商工会議所会頭の K さん 10 部

・松屋 7 部

以上のようにして、当日 2 日間の配布を行った。

○反省

配布に関してはまず、自主性が足りなかったことが反省として挙げられる。大学の長期休暇中ということもあってゼミ生が集まって配布の計画を練ることができず、仕方ないことではあるが、配布の部数が事業団によって決められていた。事業団の計画を知らされたのも配布の直前であった。また、先生や事業団の意向を伺い過ぎていたということも挙げられる。事前の計画をもっとしっかりしておけば、当日のタイムマネジメントもより良いものになっただろう。例えば、二日目はフォルティアの社長とほとんどの時間を過ごしたため、時間の配分がうまくいかなかったという反省もあった。

良かったこととしては、須坂市民と話す機会を多く持てたことである。配布の際にお店の人などとお話することで、一気に人のネットワークが広がった。ただ裏を返せば、それまではそうしたネットワークを築いてきていなかったということである。より早い段階で、現地の人との交流を行っておけば、フリーペーパーに活かすことができたかもしれない。

○フィードバック

フリーペーパーを作成するうえで、読者の方からフィードバックを得たいということを考えていた。そのために、紙媒体とウェブ媒体を使ってアンケートを作成した。しかし、フィードバックは一件も送られてこなかった（5 月 3 日時点）、ここでフィードバックに関して考察を行うことはできなくなってしまった。配布の時などにアンケートを書いてもらいたい旨強調しておけば良かったかもしれない。

5. おわりに

フリーペーパー「すぎかる」作成は、予定通りいかないことばかりだったかもしれない。雑誌完成も予定より数ヶ月遅くなり、また期間が延びるにつれて作成に関わるゼミ生の数も次第に減っていった。また、ある程度の質のあるものを作るためには一箇所で集中的に考える必要があり、ゼミ生が東京でフリーペーパー作成のほとんどの事項を決めてしまってもいた。物理的に遠く離れた場所にいる「市民との協働」の難しさも感じた。

そのような難しい点があったものの、やはり「すぎかる」は製作に関わった市民、あるいは取材を受けてくれた市民の方の本気、切実な気持ちを明らかにすることができたと思う。今後についてであるが、ゼミと共同で仕事を進めてくださっていた文化振興事業団の K さんが異動になってしまった。そのため小林ゼミは「すぎかる」の作成で須坂での活動から手をひくことになった。短い期間の活動であったが、須坂にある程度の「つながりの芽」を残すことができたはずである。